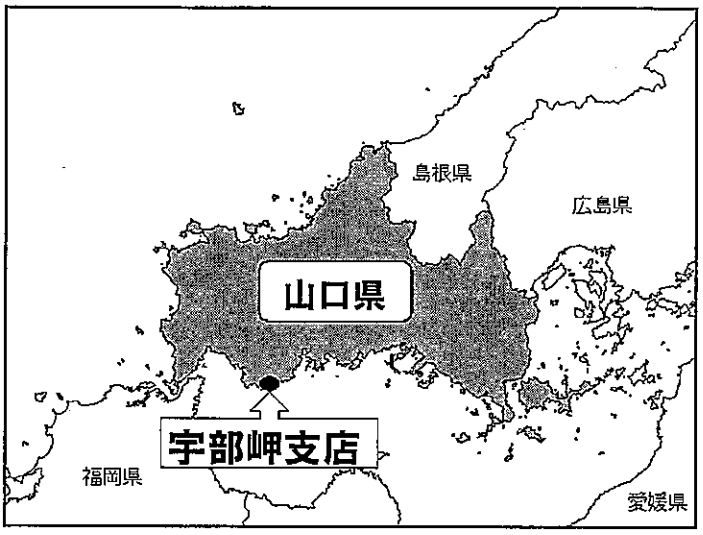
力を合わせて出来たこと！
～水産高校と肩を組んで～

山口県漁業協同組合宇部岬支店青壮年部
木　下　隆　規

１．地域の概要

私たちが住む宇部市は、本州西端の山口県の瀬戸内海側に位置し、石炭産業を礎に形成された人口 18 万人の臨海工業都市である。



２．漁業の概要

私たちの所属する山口県漁協宇部岬支店は、総組合員数 209 名で、潜水器、ノリ養殖、小型底びき網、刺し網などさまざまな漁業が営まれ、本県瀬戸内海でも屈指の漁業地区として最盛期には約 30 億円の水揚げを誇っていたが、近年は約 10 億円程度の水揚げ金額で推移している。

３．グループの組織と運営

青壮年部は昭和 27 年に設立された青年組織を起源とし、昭和 59 年の組織改編により誕生した歴史のある組織で、これまで、さかな祭りの開催や、クルマエビ、アサリの中間育成放流などの活動を活発に行ってきた。特に、ここ数年は漁場環境の保全に力を入れており、アサリなど二枚貝の天敵であるナルトビエイの駆除活動では地区で中心的な役割を担っている。（図１）

４．実践活動取組課題選定の動機

宇部岬地区は県内でも比較的若い漁業者が多い地区だが、他地区と同様に資源の減少や魚価の低迷などで漁業所得が大幅に減少しており、最盛期に 450 名を数えた組合員数が半減する中、ここ数年は、新規に加入する者がほとんど無い状況で、一部の漁業で労働力不足が目につくようになってきた。青壮年部も昭和 59 年の改編当時に 100 名以上いた部員が現在では 34 名にまで減少しており、最近では、人手不足から活動や取り組みに支障が生じはじめた。組合員の減少は組合の存続そのものにかかわる重要な問題であり、執行部でも強い危機感を持っていた。そこで、執行部と協議を重ね、平成 20 年から、漁業就業者フェアに出展するなどして新規就業者を求める取り組みを開始した。（図２）

しかし、この取り組みはなかなか上手くいかなかった。収入面に過度な期待を抱く者や漁労作業の辛さを知らずに海への憧れだけで就業を希望する者が多く、漁業の実態を理解していない人がほとんどだったのだ。

この結果を受けて、青壮年部で再度話し合いをしたところ、多くの部員から「漁業に馴染みのある人にターゲットを絞った方が良い！」との意見がでた。そこで、支店や山口農林振興公社を通じて水産高校に相談を持ちかけた。この時、水産高校では、「現場で活躍できる生徒を育てよう」という「水産高校プロジェクト」が実行に移されようとしていた時期で、幸いなことに沿岸漁業の研修先を探していた。早速、支店執行部の了解を得て、青壮年部として研修を受け入れることにした。（図３）

５．実践活動状況及び成果

(1)水産高校プロジェクトによる研修の実施

受け入れに関して２つの大きな方針を立てて取り組んだ。

１つ目は、生徒が「本当に漁師になりたいのか？」を自分で判断することが重要なので、より実体験に近づくよう積極的に手伝わせること。

そして２つ目は、「自分はどの漁業をやりたいのか？」を把握させるため、より多くの漁業種類を体験させることである。（図４）

平成20年８月、計画から実施まで、わずか１ヶ月程度しか時間が無かったため指導者の確保に苦労したが、地区内で色々な漁業が営まれている利点を活かし、幅広い漁業で研修を実施した。（図５）

炎天下の過酷な研修で疲れ切ったにもかかわらず、生徒のうち数名から「漁師になりたい」との声がきかれた。更に12月には、これらの生徒を対象に２回目の研修を実施し、操業時期が冬場に限定されるノリ養殖や潜水器漁業を体験させた。年間で最も冷え込む夜間や早朝にまたがることもあったが、生徒は過酷な操業に文句を言わず、「将来漁師になりたい」という意志を変えなかった。（図６）

こうして水産高校プロジェクトとしての研修は無事に終わったが、水産高校から与えられた内容だけでは物足りなさを感じていた。特に、漁業の最大の魅力である「努力して得られる収入の喜び」や最大の不安要素である「コスト割れの辛さ」など、伝えきれなかったことが山ほどあったのだ。

(2)自主研修の実施

そんな中、平成21年３月、学校を通じて、漁業研修に参加した２年生の生徒２名から「底びき網漁業に就業したい」との相談があった。（図７）

部員の間からは「わずか数日間の研修を体験しただけで就業しても、現実を知り挫折する可能性が大きい」と心配する意見が出た。そこで、水産高校に対し、この生徒２名を対象に「自主的に、より実践的な研修をさせてもらえないか？」と要請し、平成21年10月から研修を実施することが決まった。この研修を受け入れるに当たり、再度、体制を練り直した。

同じ漁業種類でも船によって経営方針が異なるため、「より多くの実例を見て理解してもらいたい」と考え、底びき網業者４名でグループをつくり受け入れた。（図８）

漁具の補修や給油を体験させ、逐一、どのぐらいの経費が必要かを理解させた。研修

を重ね現場の厳しさを理解させる一方、競りを見学させ、自分たちが獲ったものがいくらで売れるか。技術と知恵とやる気次第で儲けが左右されることを実感させた。(図９)

また、組合活動など、漁業は周りの人々の協力がないと成り立たないことを理解させた。更に、若い青壮年部員との交流の場を度々もち、年の近い漁業者がどのような苦労と生き甲斐を感じ漁業に従事しているかを伝えた。(図 10)

こうした研修は長期にわたり、研修を通じて、生徒２名が、今年３月の卒業後、宇部岬で底びき網漁業に就業する決意を固めた。

(3)新規就業者受け入れのメリット

この２人が就業することで、底びき網業者にも新規就業者の彼らにも大きなメリットが期待できる。今、宇部岬地区の底びき網は労働力不足により１人乗りの船が増えている。彼らが独立するまでの間、それぞれ別々に１人乗りの指導者の船に乗り込んで修行してもらえれば、各々の乗り込んだ船を２人乗りとすることが出来る。(図 11)

２人乗りであれば、１人が操船する間、もう１人は選別に集中できるため、効率よく操業が出来、多くの漁獲が得られる。更に、選別作業が迅速に行えるので、漁獲物の鮮度が良く、単価アップが期待できるため、１人乗りに比べ、１人当たりの収益をより多くすることが可能となる。これにより、指導者も研修生も安定した収益のもとで、独立に向け安心して修行を積むことが出来る。

また、底びき網漁業では、他の漁業と同じく漁場の探索が漁獲に大きな影響を与えるので、将来彼らが独立して船団に加われば漁場の探索が広範囲に出来て、より効率的な漁獲が可能となる。

(4)浜の意識の変化

実は水産高校の受け入れについては、当初、宇部岬の中でも、「新人が入ると自分の獲り分が減る」とか、「どう育ててよいか分からない」などの意見があり、必ずしも一枚岩ではなかった。しかし、私たちの取り組みを通して、意識面も含めて地域全体での受け入れ体制が徐々に整っていった。(図 12)

最初の年は青壮年部員だけで準備を行ったため、研修に使用できる漁船の数が限られ、延べ 35 名の生徒しか受け入れることが出来なかった。そこで、次の年は、青壮年部のＯＢなど、自分たち以外の漁業者にも応援を要請し、指導者を確保した結果、延べ 144 名もの生徒を受け入れることが出来た。(図 13)

水産高校の生徒は熱意がある上、学校の授業を通じ漁業に関する一通りの知識があるため、覚えが早く、指導を行った漁業者からも教え甲斐があると高い評価を受けた。そのため、指導を希望する者が多数現れるようになった。(図 14)

また、生徒のやる気に押され、年配の漁業者からは廃業時には漁船、漁具を全部譲っても良いという前向きな意見が出るようになった。

更に、生徒たちは明るく礼儀正しいことから、漁業者だけでなく地域の住民からも大変親しまれ、私たちが彼らの下宿先をさがしたところ、快く引き受けてくれる所が見つかり彼らを受け入れた後の日常生活に関する心配も解消された。(図 15)

６．波及効果

(1)就業希望者の増加

漁業研修に参加した生徒を通じて水産高校の多くの生徒に沿岸漁業の魅力が伝わり、現在では７名もの生徒が沿岸漁業への就業を希望するようになった。

(2) 加工品の共同開発

生徒との交流の中で、水産高校に優れた加工技術があることが分かり、有害生物として駆除していたナルトビエイを女性部とともに水産高校の実習室に持ち込み、生徒と共同開発を行った結果、加工品として商品化することが出来た。(図 16)

７．今後の課題や問題点

(1) 他地区への漁業研修受け入れの働きかけ

県下の各浜で高齢化が顕著となる一方、漁業研修を通じ水産高校の多くの生徒が沿岸漁業に魅力を感じており、漁業研修の受け入れは各浜にとって新規就業者を確保する大きなチャンスである。今後、青壮年部連合会などの活動を通じて他地区にも漁業研修の受け入れを積極的に働きかけていきたい。(図 17)

(2) 受け入れ側の責任と今後について

私たちには、新規就業者を受け入れた側の責任として彼らが安心して漁業を続けられるよう資源の減少や魚価低迷など、私たち自身が抱えている問題を解決していく義務がある。

このため、私たちは、直販による収益の向上や新規種苗の放流などにも積極的に取り組み、少しずつではあるが成果を上げている。そして、この成果を更に高めていくためには漁協はもとより水産高校や行政機関など多くの関係者の協力が不可欠である。

今後も多くの仲間を受け入れ、彼らと肩を組んで漁が出来るよう、関係者みんなで力を合わせて取り組みを広げていきたい。(図 18)

図１　ナルトビエイの駆除作業

図２　新規就業者フェアへの出展

図３　水産高校プロジェクト

図４　受け入れ方針

図５　水産高校プロジェクト（夏）

図６　水産高校プロジェクト（冬）

図７　生徒からの就業希望

図８　グループによる受け入れ体制

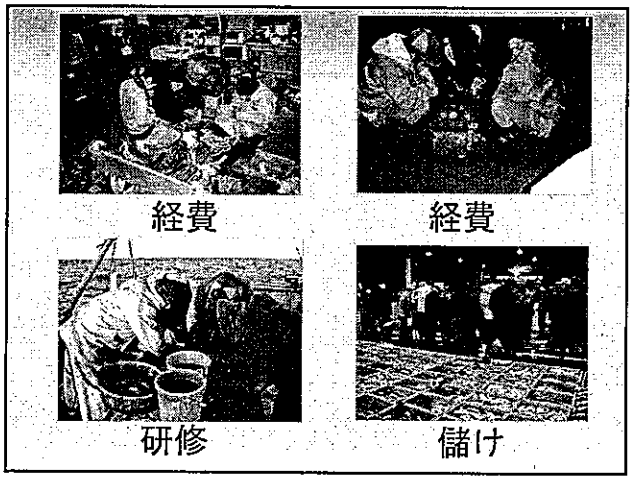


図９　自主研修の実施

図10　青壮年部員と交流

図11　二人乗り体制の確立

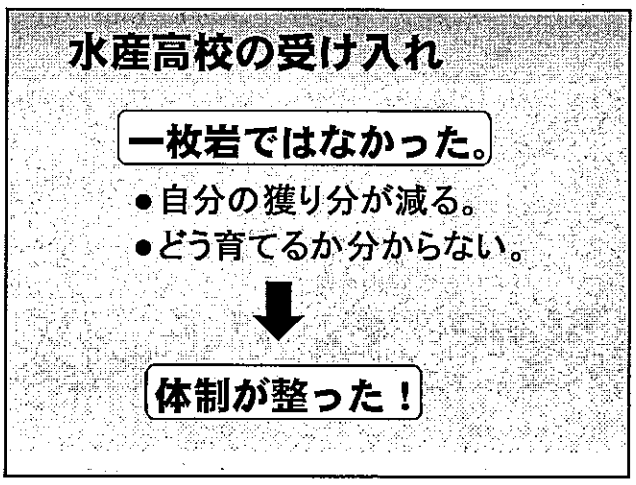


図12　受け入れ体制の整備

図13 多数の生徒の受け入れ

図14　多数の指導希望者

図15　生徒の評判

図16　ナルトビエイの商品化

図17　他地区への働きかけ

図18　みんなで力を合わせて！